(『国語学』第51巻2号　2000・9・30)

文字・表記(史的研究)

今野真二

はじめに

本稿が掲載される国語学会の機関誌『国語学』が51巻1号から〈横書き主体の体裁〉に移行することに伴なって，この平成10年・11年における国語学界の展望が〈横書きで統一〉(展望号執筆要領)されているはずであることを，まず日本語の表記に関わる動きの一つとして挙げておくことにする。以下，本稿の書き手は稿者，とりあげている論文のそれは筆者と称する。論文の副題及び筆者に対する敬称は略させていただく。

河野六郎が〈文字の研究，とりわけ文字の言語的機能を扱う文字論ともいうべき領域が，当然言語学の中にあってしかるべきであるが，現在のところ，いまだ十分に理論構成がなされていないため，その分野の研究は今後の発展に期待しなければならない。〉(「文字の本質」『岩波講座　日本語8　文字』1977.3)と述べてからすでに20年以上が経つが，国語学が言語学という枠組みの中に位置を占めていることからすれば，斯学における文字・表記研究も，〈言語的機能〉に対する目配りなしには成立し得ないというのが稿者の立場である。言語を書き表わす為の文字(漢字・仮名)についての分析は，そのままでは素材についてのそれに留まると考えるが，その文字が表わしているであろう言語との結びつきが射程に入っているとは考え難い論文が少なからずみられるように思う。素材そのものがみえているという点で，みえているものにとらわれやすい研究分野であるとも言え，みえていないもの，つまり〈(言語的)機能〉に分析が及ばない論文はある意味では「論」としての資格を問われることになろう。今，分析している資料が属する〈文字社会〉を的確に想定し，当該時期の言語と文字・表記とがいかなる関わり方をしているかをモデル化することが重要である。モデルとは仮説の謂でもある。また言語研究の中での文字・表記研究であれば，いずれにしても「社会的」あるいは「恒常的」ということばと結びつくような現象を扱うはずで，分析は普遍的なことがらの追究に向かうのが筋であろう。藤原俊成にのみみられる文法事象がないかと考える研究者はおそらくいないであろうし，分析の結果をそうした方向で解釈しようという発想もおそらくは生じない。しかし，文字・表記研究にはそうした芽が少なからずみられる。むしろそうした傾向がここ数年間の間につよくなっているようにさえみえる。ところで，当該年のこの分野に属するであろう著書・論文等を網羅的に掲げることは展望の目的ではないであろう

し，また紙幅もそれを許さないので，以下は思い切って重点的な記述を心がけることにする。

まず当期纏められた論文集・単行本等について一括してふれておく。小林芳規『図説日本の漢字』（大修館書店，1998.11）は，掲げられた豊富で鮮明な図版も魅力であるが，単著としての出版であり，〈筆者のこれまでの文字史に関する研究の軌跡〉（199頁）として，ひとつの立場から一貫して記述されていることを特色とする。迫野虔徳『文献方言史研究』（清文堂，1998.2）では第六章において天正狂言本を採り上げているが，当期内山弘編著『天正狂言本　本文・総索引・研究』（笠間書院，1998.2）が出版され，研究編には「天正狂言本の表記について」という一節を有する。村上雅孝『近世初期漢字文化の世界』（明治書院，1998.3）は，本誌第198集に齋藤文俊による書評が，田島優『近代漢字表記語の研究』（和泉書院，1998.11）は本誌第199集に佐藤亨によるそれが逸早く掲載されている。松本暎子『西本願寺本三十六人集の字彙』（汲古書院，1998.8）は，標記の書の各集の漢字・仮名の使用状況に関しての総合的なデータを示す。今後いかに活用するかが課題である。古屋彰『万葉集の表記と文字』（和泉書院，1998.10）が纏められた。馬渕和夫『古代日本語の姿』（武蔵野書院，1999.1）の「資料篇」「音韻篇」には上代語の文字・表記に関わる多くの論考が収められている。小谷博泰『上代文学と木簡の研究』（和泉書院，1999.1）は第2部の4「巻十九における大伴家持の表記法」，第3部の6「飛鳥藤原時代木簡の表記法をめぐって」が〈新規執筆〉。酒井憲二『実語教童子教――研究と影印――』（三省堂，1999.2）は「国語学的考察」中に「かなづかいなど」の項を有する。佐藤信『古代の遺跡と文字資料』（名著刊行会，1999.5）もある。千野栄一『ことばの樹海』（青土社，1999.5）には「文字を作った人々」の節がある。雑誌では『日本語学』（17-12,1998.10）（以下**日**と省記）が「文字の歴史と現在」と題した特集を，『国語と国文学』（76-5,1999.5）（以下**国**と省記）が「文字」と題したそれを編んでいる。

漢字

石塚晴通「漢字字体の日本的標準」（**国**）は卜部家が文永11（1274）～建治元（1275）年頃に新しく作成した卜部兼方筆本日本書紀を資料として，その巻二で使用された漢字字体を『干禄字書』と比較し，〈漢字の字体は『干祿字書』の基準を承け入れてはゐ〉ないと結論付ける。『日本書紀』という8世紀に成立したテキストの，13世紀写本を分析資料としていることが結論とどう関わるのかをさらに踏み込んで述べていただきたかったと思う。池田証寿「徒然草第百三十六段の一解釈」（**国**），佐藤稔「擬製漢字（国字）小論」（**国**）はともに興味深い問題を扱う。後者では「新在家文字」ということばに連歌が結びつけられているが，実際の連歌懐紙における漢字使用については今後調査を重ねていく必要があろう。當山日出夫「コンピュータの文字に対する意識について」（**国**）はおそらく文字・表記（理論・現代）でも採り上げられるであろうが，こうした研究が史的研究に

新しい視点を与えることが少なからずある，と考える。例えば當山は「文字概念」を〈規格を決める側の意図〉とみて，その文字を〈人々がどのように意識しているかという，文字意識とでもいうべきものが重要〉と述べるが，文字概念と文字意識とをどのように考えていくかという問題は，現在表記研究が直面している，〈書き手と読み手の問題〉（乾善彦「戯書の定位」（『井手至先生古稀記念論文集 国語国文学藻』和泉書院，1999.12））（以下**井**と省記）に緩やかに連なるようにみえる。乾には近世の漢字字体意識を扱った「書体と規範」（『国語学』199,1999.12）もある。佐藤栄作は文字研究を理論面から着実におしすすめている一人であるが，「草書・草化と字体」（**国**）は，これまであまり正面から採り上げられることのなかった草書・草化を原理的に位置づけようとしたもの。〈字体エレメント〉という概念は有効であると考えるし，近時盛んな仮名文字遣分析に理論として大いに関わる。同じ筆者による「漢字字体とは何か」（**日**）と併せて参照されたい。田村夏紀「観智院本『類聚名義抄』と『龍龕手鑑』における漢字字体の記載の比較」（『早稲田日本語研究』6,1998.3）は事実を示すに留まる。同じ筆者の「『干禄字書』と観智院本『類聚名義抄』の正字・異体字の比較」（早稲田大学『国文学研究』125,1998.6）は主に標記の両書の〈記載形式〉と〈字体注記の種類〉の比較を行なったもので，論文題名から自然に考えられるような内容をもたない。つまり漢字字体を直接扱ったものではなく，こうした分析が字形・字体を問題にしないで行なわれていることはどうか。また「漢字字体の史的研究に関わる一問題」（『国語文字史の研究』4，和泉書院，1998.8）（以下**史**と省記）はいかなる射程をもつ分析であるのかがわかりにくい。

仮名

矢田勉「「平仮名らしさ」の基準について」（**国**）は，平仮名と漢字とを文字体系としても一具のものとして問題設定を行なっている点に注目したい。論文中に〈平仮名字体史〉，〈日本の漢字書体史〉という表現がみられるが，〈文字社会〉を限らない，何の限定辞もつかないこうした〈史〉が描かれる為には，まだまだ時日を要すると考える。矢田には「平安・鎌倉時代における平仮名字体の変遷」（**史**）もあり，〈一貫して生活上の実利に通じた資料を用いて平仮名史を記述すること〉を試みたもの。確かにこれまでの分析は〈綴りの美〉に関わる資料によって行なわれるという傾向があった。しかし結局のところ，実用的な文書と美的要素を多く含む文書とが二項対立して存在するわけではなく，むしろなだらかに連続するモデルとして捉え直すのがよいのではないか。

漢字による表記

漢字で日本語を表記するということが結局いかなることであるのかということがらに関わる考究が上代資料を中心に，前展望期に引き続き活発に行なわれている。当期西條勉『古事記の文字法』（笠間書院，1998.6）が出版され，また神野志隆光，山口佳紀，犬飼

隆，西條勉四氏による座談会「古事記はよめるか」（『リポート笠間』39,1998.10）が行なわれた。西條の前掲書についての書評が犬飼隆（『国語と国文学』76-2,1999.2），小谷博泰（『国文学研究』127,1999.3），内田賢徳（『万葉』171,1999.11）の三氏によって行なわれており，人を得た書評故，座談会と併せ読むことによって，この分野の状況を窺うことができる。奥村悦三「ことばが選ぶもの，ことばを選ぶもの」（**国**），瀬間正之「漢字で書かれたことば」（**国**），小谷博泰「七世紀における日本語の文章表記」（**国**），犬飼隆「観音寺遺跡出土和歌木簡の史的位置」（**国**），佐佐木隆「『万葉集』の〈丹〉字と〈穂〉字」（**国**）はいずれも当該時期の表記について興味深い切り口をみせる。犬飼には「『地名字音転用例』が論じたもの」（『鈴屋学会報』15,1998.12）もある。また西宮一民「上代日本の固有名詞の表記」（『万葉』165,1998.3），奥田俊博「『万葉集』訓字主体表記巻における懸詞の表記」（『万葉』167,1998.11）も興味深い。乾は「万葉集の文字遣い」（『アエラムック　万葉集がわかる』朝日新聞社，1998.2），「万葉用字法体系研究史の残したもの」（『文学史研究』39,1998.12），「宣命書きの成立をめぐって」（『大阪市立大学文学部創立五十周年記念国語国文学論集』和泉書院，1999.6）（以下**大**と省記），「書くことの位相」（『国文学　解釈と教材の研究』44-11,1999.9），「長奥麻呂の物名の歌」（セミナー『万葉の歌人と作品　第三巻』和泉書院，1999.12）と，この分野でも精力的に発言する。乾の一連の論には〈連続〉ということばがよく使用される。これは，これまで個別的に「齣」として捉えられていた事象を，より大きな整合性のある枠組みの中に配置し直し，滑らかで統一感のある〈文字社会〉モデルとして再編成しようとしていることの現われであり，各論文が具体的な問題を扱いながら原理面への目配りがつねになされていることと表裏をなす。その滑らかさは，例えば宣命大書体，宣命小書体を史的な流れとしてのみ捉えるのではなく，小書きの方法を〈選択的（オプショナル）〉とみることなどによく現われている。当期の考察には近年出土が続く七世紀の木簡資料の状況を見渡しにいれる必要がよりいっそう強まっている。文字・表記研究では何が確定的なことがらで，何が臨時的・汎時的あるいは〈選択的〉におこり得ることがらであるかをみきわめることが重要であり，具体的な実現に際しての自由度（＝振幅）のほどよい想定が求められよう。乾の前引「戯書の定位」では〈書き手の意図が読み手に伝わることを前提としなければ，書くことの工夫も必要ないわけで，読むことができなければ，～それは書き方としては失敗だったということになる。〉（136頁）と述べるが，これは書き手と読み手との問題を提示しつつ含むところが多い。〈文字社会〉がきわめて狭く閉じられていると予想される上代では書き手の存在が相応の比重を占めるであろうし，出版によって〈文字社会〉がきわめて拡大した近世以降は，そのこととは別に個の意識が書き手を支えると考えるが，両者に挟まれた時代にいかなるモデルを考えるべきか。〈手書き時代の書記史の原理は書き手の立場の側にあり，印刷時代の書記史の原理は読み手の立場の側にある。〉（矢田勉「印刷時代における国語書記史の原理」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院，1998.2）（以下**東**と省記）は当該論文の流れにおいてはそうで

あろうし，一つの事実でもあろうが，表記研究という観点からは，それぞれの時代の〈書き手〉〈読み手〉がどのようなものであるのか，等質なものとして括ることができるのかどうかを注視することも必要であると考える。稿者は〈まず，読む側の立場から，書記テクストに認められる諸現象を捉えるべき〉（小松英雄『日本語書記史原論』笠間書院，1998.6）（26頁）と考えるが，そうした書き手と読み手との関わりを通時的にどのようにモデル化するかも今後の課題であろう。

漢字仮名/仮名漢字 交じり表記

小川栄一「延慶本平家物語における文字表記の機能」（『国語学』192,1998.3）が応永に書写された延慶本の『平家物語』という，判断や処理がきわめて難しいテキストを選択して俎上にのせた理由は何か。また数値に基づく分析を試みながら，〈仮名の大小で境界標示する場合〉1492例よりも，しない場合8183例が圧倒的に多いことが結論との関わりの中で充分に説明されているのだろうか。門前正彦・渡邊美由紀「漢字仮名交り文と助詞」（同志社女子大学『日本語日本文学』11,1999.10）は小川に対しての疑問を含んだもの。前掲の小松英雄『日本語書記史原論』はこの分野の後学の必読書と言えよう。含むところがきわめて多く，ここで詳細にふれることはできないが，二つの箇所を引用しておく。〈先に語があって，それに対応する表記があるという当然の関係が，しばしば逆転して把握されている。〉（13頁）〈先に語があって〉の〈語〉を音声実現されたもの（＝奥村の〈声のことば〉）と考えると，上代においてはそこに議論があろうが，まずは一つのモデルとして認められよう。そしてもう一つ。〈文字論/文字史とよばれている領域の自律性を認めることに小論の筆者は消極的である。〉（35頁）各々の置かれている文脈にそって改めて読んでほしい。かたかなについての分析には久保田篤「黄表紙の片仮名」（**国**）がある。同じ筆者に「『金々先生栄花夢』の文字の用法について」（**東**）もある。小林恭治「カタカナと観智院本類聚名義抄の転写の階層」（『日本語学』17-8,1998.6）は表記の分析が何をどこまで明らかにできるかという問題提起にも繋がる。

異体仮名の用法，すなわち仮名文字遣についての分析は変わらず活発であったが，分析の方向に問題を含むものも少なくない。すでに10年以上前に〈～定家の用字体系の歴史的な位置づけを問うとすれば，俊成からの継承としての一面と，用字法それ自体の，言語の表記として要請された，いわば必然的な展開としての一面との，両面から顧慮がなされるべきであろう。〉（伊坂淳一「藤原俊成の用字法・試論」『学苑』578,1988.1）と述べられているにも関わらず，こと藤原定家に関しては前段の追究のみに終始するむきがあり，加藤良徳「定家仮名遣再考」（『名古屋大学国語国文学』82,1998.7），「藤原定家の異体仮名の用法」（『国語と国文学』76-7,1999.7）はそうした傾向下にある。〈再考〉とあるが，これまで先学が積み上げてきた成果を受け継いだ上でのそれ，とは映らない。長谷川千秋「仮名文字遣序説」（奈良女子大学『叙説』26,1998.12）の〈序説〉も先学の研究を充分

にふまえているのだろうか。豊田尚子「藤原俊成自筆『古来風体抄』における異字体をもつ仮名について」（『鎌倉時代語研究』21，武蔵野書院，1998.5）には〈俊成のより純粋な用字法を追究する〉とあり，疑問。同じ筆者の「藤原俊成自筆『廣田社歌合』にみられる仮名の字体について」（『三重大学日本語学文学』10,1999.6）では前引の伊坂論文が引用されているが，そこで述べられている〈表語機能〉はおそらく伊坂の意味するところを離れている。藤原定家・俊成に関わる表記研究の類の蓄積は膨大なものであろう。そこまで特定の個人を採り上げ続けることが訝しくもある。内田宗一「黄表紙・洒落本の仮名字体」（史）は分析の手順，視点がしっかりとしていて無理がない。対象資料を総合的に見渡しているところがよい。同じ筆者に「柳亭種彦自筆資料の仮名字体」（大阪大学国語国文学会『語文』71,1998.10）もある。遠藤邦基は「音便の読癖」（関西大学国文学会『国文学』75,1997.3）以来〈表記を改変せずに読み方を変えること〉ということがらを追究している。それは音声実現のままには書かないあるいは書けないということの追究でもある。当期もこうした課題を見据えつつ「連声の表現効果」（『国文学』77,1998.3），「促音・入声音の「ンツ（ンチ）表記」」（『国語国文』67-12,1998.12），「「青紙」から「平地」へ」（『国文学』78,1999.3），「定家仮名づかいの世界」（大），「牛の角文字」（『関西大学文学論集』49-1,1999.10），「定家の表記意識」（井），「清濁の読癖」（『文学史研究』40,1999.12）と多くの論考を公にしている。具体的な資料を通して設定された問題を解明していく，その迫り方がきわめて丁寧であり，そうした方法を学びたい。

その他

釘貫亨「『和字正濫鈔』の理論構成」（『万葉集の世界とその展開』白帝社，1998.4），「「喉音三行弁」と近世仮名遣い論の展開」（『国語学』192,1998.3）は近世の仮名遣い論を〈いろは歌から五十音図へ〉という〈枠組みの転換〉によって読み直す。笹原宏之「元禄十四年刊『俗字正誤鈔』における「正字」「俗字」「誤字」とその典拠」（史）は当該時期の漢字使用の実態と併せて報告すべきものではないか。酒井憲二「甲陽軍鑑の通用字」（史）は漢字の通用について具体的な事例を挙げつつ検討するが，今後はこれまでに蓄積されたことがらを基に中国をも見渡しに入れた上で〈通用字〉ということを定位させる必要があろう。近藤尚子「二つの『好色一代男』」（『文化女子大学紀要』6,1998.1）は上方版と江戸版とを主に表記面から比較したもの。西崎亨「活字と肉筆」（『武庫川女子大学言語文化研究所報』10,1998）は〈活字印刷のシステム〉を扱うが，含むところが多い。小島憲之『漢語逍遙』（岩波書店，1998.3）には同氏の方法と〈瑞々しい好奇心〉（同書帯カバー）とが凝縮されている。工藤力男「現代表記の論理と美学」（『成城国文学』15,1999.3）も興味深い。山田俊雄『詞苑間歩』上・下（三省堂，1999.9）は，これまで『詞林逍遙』（角川書店，1983.7），『詞林間話』（同，1987.7），『ことばの履歴』（岩波新書，1991.9），『ことば散策』（岩波新書，1999.8）に少しずつ収められていた俳誌『木語』に連載されていた「詞苑

間歩」をすべて収めたもので，もちろん文字・表記が話題のすべてではないけれども，ゆっくりと味わいつつ読みたい。藤枝晃『文字の文化史』（岩波書店，1971.10）が講談社学術文庫（1999.12）に収められたこと，籾山明『漢帝国と辺境社会』（中公新書，1999.4），森博達『日本書紀の謎を解く』（同，1999.10）が新書という読みやすいかたちで出版されたことも喜ばしい。管見故採り上げることができなかった論考が必ずや数多くあろうし，また読み誤りもあろうが，すべて稿者の力が足らないためであり，ご海容願いたい。また論文を直接お送りいただいた方々には御礼申し上げる。

——清泉女子大学助教授——